

駒の館だより

明治鍼灸短期大学図書館報

創刊号

昭和56年11月10日 発行

明治鍼灸短期大学附属図書館

〒629-03 京都府船井郡日吉町
TEL. 07717-2-1181(代)

図書館報発刊に当たり

理事長 谷口 健 蔵

私は仕事の関係上、しばしば各地の大学を視察する機会がありますが、その節、施設と言えば先ず図書館というのが私の信条であります。というのは、図書館は大学の顔だからであります。

この度、図書館報発刊に当たり、何か一言をというご依頼を受けましたので、私が平素心に刻んでいることの一端を披瀝させていただいて、その責を果したいと思えます。

私の手許の辞典によると、図書館とは、言語的、図象的な記録された知的文化財の内容を社会的に制御して利用に供する機関であると記されています。一方、歴史上では遠く、バビロニアの昔に溯ると書かれていたのには驚くではありませんか。

目を我が国に移すと、終戦後間もない昭和25年に図書館法が制定されました。総則には、図書、記録、その他必要な資料を収集し、整理し、保存し……教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする、と示されています。

およそ、近代図書館は、現代社会の必要に応じて、公共、国立、大学、学校、特殊の図書館の外に類似施設を加えて六つに分類されますが、当館はその第三番目に該当します。

そこで、大学図書館は、いうまでもなく高等教育機関に附属する図書館であって、教職員、学生、卒業生の学習、調査研究にサービスし、学生の文化団体、研究団体に資料的援助を行ない、加えて地域性豊かな資料の強化にあたるという重要な使命を帯びていることは今更申し上げるまでもありません。

特に当館は、特定の専門分野が割り当てられ、その分野の図書を購入するという責務を果たさねばならないとも考えられます。

開学後、漸く4年目、関係者ご一同のご努力により、他に遜色をみない程度の図書の整備がなされたことは誠に喜びにたえません。蔵書は一冊でも多いに越したことはありませんが、要は内容の充実であり、効率の高い利用であり、その瀬度の量ではないでしょうか。

大学に於いては、図書館ほど、その地域と密着しているものはないと思えます。その中で、それを運営する人と利用する人の人間関係はひじょうに大切であります。つまり意識の深まりが強く要求されるのであります。冒頭、私が大学の顔と申し上げた意味をご理解いただきたいと思えます。

図書館には、それを運営する者と利用する者の、目に見えない心の繋がり、声なき声にも耳を傾けるキメの細かい運営が求められます。それでこそ機能する図書館であると思うのです。私が夢にまで描いていた近代図書館への理想を申しあげましたが、折も良し、この好機に、図書館報発刊の報に接し、我が意を得たりと、はたと膝を打った次第であります。

なお、姉妹校の吹田にも図書室があります。どうか互いに連繫を密にして、図書館の持つ重大な使命にむかって邁進されますように。

最後に、この館報が、図書館の全機能のどこかで接触し、それをフルに動かすことによって、血の通った、魂のこもった図書館運営の一助ともなることを祈念して、ご挨拶のことばにかえます。

図書館報の発刊に当って

学 長 河 上 邦 治

丹波の秋色もいちだんと濃くなってきた。一年のうちでいちばん読書に親しむのによい時節を迎えた。このとき、かねてより希望していた図書館だよりの第一報がでるということは、まことに喜ばしい。

近年の若い人は書物を余り読みたがらない、漫画本の直撃やドギツイテレビを始めとする断片的なマス・メディアの氾濫によって思考力・創造力を失っているとか、いろいろな批判がなされている。このことは反省しなければならぬ現実である。

しかし、大方の傾向に対する批判はあるにせよ、書物を読むということは、若い人達にとって忘れられてはいないと思う。新しい文化を探究するという精神は、日本人の伝統的な固有のものであり、いつの時代においても、崇高さにかわりはないからである。

書物は、自分が買ってたえず座右において親しく愛読する書物と、図書館のような公共の施設で読む金額の張る辞書・全集のようなもの、または読者の最大公約数的に共通な専門書などと大別される。図書館に具備すべき書物の種類は自らこのように大別できると思う。

戦中戦後、用紙が制限されていた時代は、書物の絶対数が不足していた。私の若い頃は東京神田の本屋の前で、哲学書を求めて午前5時頃から弁当持参で列をなして本をもとめた経験が数多くあったものである。

戦後30数年、印刷物が街に氾濫している時代を迎え、今日ではいかによいい本を選択するかという時代となった。しかし、私達が求める東洋医学関係のよいと考えられる本の少ないことは諸君も同感だと思う。量より質の求められる所以である。

外国の図書も手に入りやすくなった、いわゆる国際化社会は読書の世界にも及んできた。

本学でも指定図書に指定されているものが数多くある。学生諸君は、これから始めて、片っ

ぱしから熟読してほしい。乱読でもよいから数多くの本を読むという習慣をつくって貰いたい。同時によい指導者による読書指導が大切である、多くの教官に積極的にアプローチして、よい本の推薦を求めることが肝要である。

新しい時代に即応した読書のあり方、これを体得するためにも図書館の活用が大切である。本学の図書館には、専門の司書の先生が2人在勤されている。読書の方法についても遠慮なく質問しながら、最も効率的に、いかに数多くの書物を読み理解するかということをは心がけてほしい。

古人は、「読む」という言葉は、単に書物の字句が読めるということではない、その書物に書かれた思想や内容が一通り理解できるということであると説明している。

本を読むということの意義を理解し、著者の真意を汲み取ること、これが本を読むということの大切な心構えであることは言うまでもない。

将来のよりよい医療人を志すためには、専門の図書を読みあさることはいちばん大切なことではあるが、また一般の教養書を読み、理解することも大切である。教養の乏しい医療人は将来人間的にも、専門的にも成長しないからである。

本学の教育目的は「よりよい医療人」の人間像を求めている。人間的に成長し得ない人は、みじめであるからである。精神的な成長は、肉体的な成長と合せて融合し、そこに素晴らしい人間が誕生する。

そのためにも、読書はよりよい好伴侶ともなり、自分自身の心の支柱ともなってくれることを銘記すべきである。



図書館報創刊に際して

事務局長 谷口和久

この度、本学図書館において、「駒の館だより」と題する館報を出すことになりました。

大学教育にとって図書館のもつ意義の重要性は、あらためて述べる必要もなからうと思いますが、学生諸君のなかには、未だこれに気付かない人もいます。

この「駒の館だより」は皆さんに大学図書館の使命を理解して貰い、少しでも多くの方々に図書館を利用して貰いたいという趣旨から発行されるものです。

大学図書館は、一般のいわゆる公共図書館とは性格も異なり、大学教育そのものの充実と密接に関係します。正直なところ本学図書館は施設においても、蔵書数においても他の4年制大学の図書館に比べて第一流であるとは申しませんが、他の短期大学と比べると、開学後3年半にしては、よく整備され、蔵書数についても鋭意充実に努力が傾注されています。

本学は鍼灸教育を専門とする大学であり、図書館の蔵書もおのずから東洋医学系図書が収書の中核をなしていますが、一般教養や基礎的な医学書についても、可成りの数が揃って参りました。

大学が大学である所
以は、勉学の自主性
にあると思います。手
とり足とりの勉強では
なく、自ら積極的に探
究する姿勢です。

講義を受けるに
しても、いきなり教
室に飛び込んで解る
ものではありません。
講義を聞くには聞
くだけの準備と心
構えが必要です。
ある課目を学習す
るためには、当然
それについての疑
問をもって講

義にのぞむべきであり、ただ漫然と出席するだけでは何も身につけません。

大学において、学生諸君が自主性を持つためには、それなりの努力がいらいます。

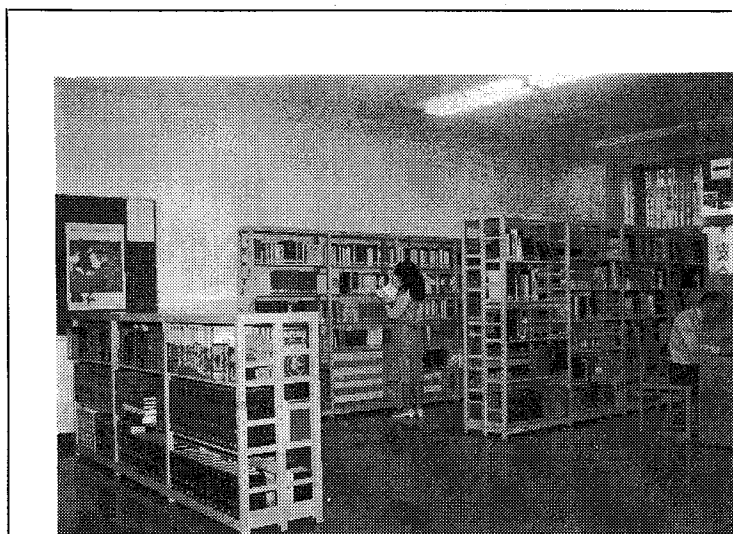
講義を理解するための準備と、講義の内容を纏め上げて自分自身のものとする作業が必要です。そしてその準備と仕上げに必要なのが大学図書館なのです。

その意味で、大学図書館は単にレポートを書く場所、試験勉強をするだけの施設ではなく、日常の勉学と研究に密着し、且それらと表裏一体の関係になければならない施設なのです。

図書館における書物との「無言の対話」は、時によっては講義を聞く以上に貴重な知識を与えてくれるでしょう。

これを機に、学生の皆さんが大学生活における図書館の役割について認識を新たにされ、一層活用されんことを切望する次第です。

× × × × × ×



図書館報刊行に当って

図書館長 高野千石

かねてより念願の図書館報がでることとなりましたので、かつてある技術科の学生たちと、文化と文明について話したことがありますので、そのことを思い出し乍ら書き留めておこうと思います。

文化とは、カルチャという言葉で云いあらわされているように、啓培すること、育てることを意味し、何か人間の心に関係しているということがわかります。いわば、心の中に、文明の原因となる実りを育て培ってゆくことであって、歴史の上でもギリシヤ文化、サラセン文化などと云うように、当時の人たちが文明のもとを民族の心の中に培養してきたものを指しているように思います。

文明とは、それが形にあらわれて来たもの、学校なり建築物なり、文化の一切の具体化した形が文明でしょう。

ギリシヤ人は真に、善に、美に、多くの哲学者たちがあらわれて思索し、数多くの文化遺産を残しました。この人たちは考える人であったわけです。何が真なのか、何が美なのか、何が善なのかと、その思索のなかから、生活のさまざまな形式、即ち文明を生み出して来ました。人間が善と悪との間に立ったとき、決然として $\tau\iota\ \phi\epsilon\nu\upsilon\gamma\epsilon\tau\epsilon\ \tau\alpha\ \alpha\iota\gamma\chi\lambda\alpha\ \epsilon\omicron\rho\gamma\alpha$ と叫んだのは、一つの文化精神のあらわれでしょう。ギリシヤの人々はかくて考え、そこに独自の文化を生み出して来たのです。 $\tau\iota$ (why?) と云うのが、文化の源泉、いずみであったわけです。

文化と文明とはギリシヤとローマとを例にとってみれば一層ははっきりすると思います。ギリシヤ人はどちらかと云えば思索の人々でありました。しかしローマ人はギリシヤ人たちの心の文化をよく実践にうつして数々の建築や土木などに大きな才能をみせました。異民族を統一して、ローマという国をつくり上げてゆく仕事は、哲学よりはむしろ政治であります。ローマの人たちはギリシヤの文化を技術の上に生かし

たのであります。

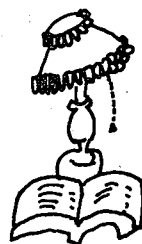
このように文化を文明に転換するものは、技術すなわち文化的実践であります。しかし、このような技術だけで、技術の源泉をつくり上げてゆく力、文明をつくりあげてゆく源泉となる心の文化がなければ、文明はそれっきりで停止してしまうでしょう。

「ローマは一日にして成らず」という言葉は、文明は文化の基礎の上にきずかれ、しかもその文化は長い間の人間の誠実な思索の集積なのだという意味なのです。ローマ人はギリシヤ人にくらべて、技術的であったわけです。そしてギリシヤ的な文化を培うことをしなかったがために、やはり滅亡してしまったわけでしょう。

ルネッサンス当時の先人たちが「ギリシヤに帰れ」と叫んだのは、このローマ人の実践にだけ、技術にだけ力を注いだためにおこってきた文明への手きびしい反省の言葉であったのです。

このように考えてゆくと、現在の日本についても、また吾々個人についても同じことが言えましよう。個人について言うならば思索と教養は、この文化に相当するものであります。そして、その個人的な文化を実践して文明人になるためには、やはり技術の力がなければなりません。文化のない技術では文明がほろび、技術のない文化は実のない花のようなものでしょう。

わたくしは、この「駒の館だより」を通して、この大学に学ぶすべての皆様が、本当に真の医術を身につけて、人文の香り豊かな鍼灸師となって、いつまでも病人の味方となって頂くことをお願いしたいのです。



東洋医学系 図書の種類について

東洋医学教室 尾崎 昭 弘

この度、本学図書館報が創刊されることになり、大変喜ばしく思っております。

創刊にあたり、東洋医学系図書の分類について本学で検討された経緯ならびにその基本的考え方について、簡単にのべてみたいと思います。

本学の東洋医学系図書は、現在、日本十進分類法 (Nippon Decimal Classification 略称: N.D.C.) によって分類整理されています。

しかし、昨今の東洋医学の盛況は、他面、東洋医学関係書籍の急増という現象をもたらし、従来の N.D.C. 分類のワク内では「図書を活用しやすい」という本来の意義を充分全うできなくなるおそれが生じてきました。

そこで、当時、図書館長の阿多実茂教授ならびに図書館主任・中村清助教授他関係者により、東洋医学系書籍を新しい発想で再分類、整理してみようという機運になってまいりました。

翌年 (昭和55年度)、前任者よりバトンをうけた図書館長の高野千石教授ならびに八木克彦図書館主任他図書館関係者は、さらにこれを具体的に推進すべく東洋医学教室 (主任・高島文一教授) の協力を得て、新しい分類整理を模

索、検討し、この度、基本的なプランが立案され、実施の運びとなりました。

新しく立案された東洋医学系図書の分類は、N.D.C.を骨子としながらも、これを若干修正、加筆し、T.0 東洋医学総記、T.1 鍼灸医学 (鍼灸基礎学、鍼灸診断学、鍼灸治療学、特殊鍼灸治療法、獣医鍼灸、鍼灸研究、物理療法などの項目に分類)、T.2 漢方医学、T.3 柔道整復学、T.4 あんま・マッサージ・指圧 (カイロプラクティックを含む)、T.5 法規、経営、保険、T.6 医療過誤、T.7 鍼麻醉・アナステオロジー、T.8 鍼灸治療機械学・医療電子機器、T.9 その他、というT.0～T.9までの項目に整理いたしました。

立案にあたって最も苦勞し、又配慮したのは、鍼灸医学です。書物の内容が基礎から臨床まで多岐にわたっていることが、その最大の理由でした。

今後、鍼灸医学の発展にともない、前述の東洋医学系図書分類に従い整理される多数の書籍が本学附属図書館にあって、広く国内外の東洋医学関係者の学業ならびに研究活動に寄与することを心から祈る次第です。

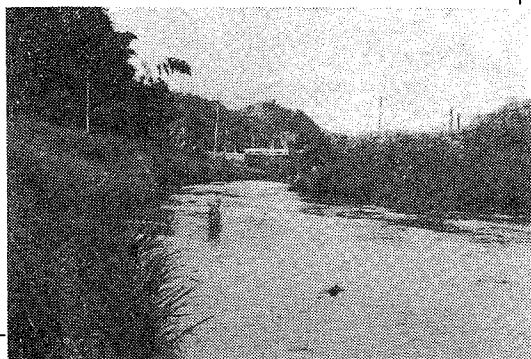
館報名の由来

大学のある日吉町は、昭和30年に世木村、五ヶ荘村、胡麻郷村の三か村が合併してできたものです。

この日吉町の北西部は胡麻高原と呼ばれ、昔は、牛馬の飼育が盛んであり「胡麻牧」(ごまのまき)と呼ばれていました。

「延喜式」(左右馬寮)に「丹波国胡麻牧(左寮)……右諸国所、貢馬牛各放二件牧一、随、事繫用」とあり、攝津・近江・播磨の各牧とともに牛馬を貢進した所であり、駒が転じて胡麻という地名になったとされています。

大学の近辺を流れる胡麻川も駒川の転じたものと考えられ、これが館報名にとり入れられたのです。写真は大学の前を流れる胡麻川(こま川)です。(日本歴史地名大系第26巻「京都府の地名」参照)



粘土の本

助教授 中村 清

石と煉瓦の長い階段を何十段か上った所はテラスになっている。そこから町が一望の下に見渡せる。低い箱型の家並がここを中心にして広がり、その外側には縦横に走る灌漑水路が緑の間を縫って平らな地平線に続いている。テラスの壁の煉瓦には建造者の名が刻まれている。階段を降りて隣の王宮に入る。門をくぐった一角の建物の一つに入り、壁の案内板を見て目差す部屋を探し当てる。入口の傍に設けられた目録で先ほどの名についての記録を収納してある棚とつぼの番号を調べる。つぼから取出した文書でもう一度番号、配置記号、標目を確認してから読み始める。

これはタイムトンネルをくぐって我々が紀元前7世紀のアッシリア（現在のイラク）の首都ニネベに飛び、王宮図書館を利用すると想像してみたものです。この図書館はアッシュルバニパル王が神殿や宮殿と共に建設したものです。当時方々に散在していた各種の粘土板文書を人を派遣して精力的に収集し、また自国の栄光の記録をも多数作成させ利用し易いよう整理して、初めて（発掘された限り）数万の蔵書を有する本格的図書館を造った彼は、さしづめ最初の図書館長といったところでしょうか。

粘土板自体はさらに2千年以上前から用いられ、各地に図書館のあったことも知られています。今日残っているのは断片ばかりですが、5千年を経てなお十分に読めるとは実に驚くべき耐久性です。文書の材料としては他に木や竹、パピルス、羊皮紙などありますが、残っているものは比較的僅かです。メソポタミアで身近な良質の粘土を使ったのでしたが、風火、破壊にもよく耐えて、当時の政治経済・文化を今日に伝えています。

記録を後代に伝えること、それは永生を願って巨大墓を造営し、記念碑を建立し、肖像を造らせた古代人の当然の努力だったのでしょう。粘土や石はその格好の材料でした。葦や金属の

ペンで書き込む時には湿って柔かく、絵でも文字でも円筒印章でも容易に押刻でき、また書字練習生は何度も書いては消しを繰返したようですが、一たん陽に干し、あるいはかまどで焼くと固くしまり、用の済んだものは建築用の煉瓦にも使ったようです。商取引の契約書や往復書簡としては、持運びの不便さや割れ易さはあったでしょうが、面白い利点もあります。例えばシール代りの封筒で包むこともできました。書き上げた板を再び粘土でくるみ、上に同文を書いて乾かせば、内外が同じように収縮して以後中の文を改ざんすることは困難になります。縮んだ板の封筒を取り代えることはできないからです。

















神話物語、叙事詩、儀典文書、法典の写し、王名表、支配者の功業物語、年表、王の事蹟を述べた建造物礎石文の写し、在外大使への訓令文書、貢物や租税の記録、重要な取引記録などを収めた文書館や図書館は、一体誰がどんな目的で利用したのでしょうか。神殿の書庫は伝統を守る神官たちがしばしば訪れて儀典の準備をし、民族の神的起源を物語る腹案を練り、宇宙世界の深遠な起源を冥想したに違いありません。また為政者及び行政官は王国の歴史を研究して不滅の記録を確認し、国の施策を立て、それにさらに自らの功績を加えることに専念したことでしょう。読み書きが恵まれた階級の特権であり、書写が専門職であった時代では、図書館の雰囲気も蔵書の内容もむしろアカデミックであったようで、集められた学者たちに管理が托されていました。

アッシリア以外にもエジプトやバビロニアなどから莫大な数の粘土板が発見されました。神殿書庫や王宮文書館、図書館の遺跡が見つかり、掘り出された文書断片は50万箇に達すると言われます。これらは各地の博物館、研究所に保存されていますが、博物館を訪れる一般人の多くは、黄金製品、精巧な象牙細工、巨大な浮

彫等の方に眼を奪われて、粘土板等の記録品の部屋は素通りしがちです。しかし幾多の傑出した英知の学究により解読が進められ、当時の人人が活々と我々に語りかけてくる記録文書や碑文がなければ、そうした魅惑的な遺物もそれだけでは古代の生活や社会情勢について、一体何が起ったのか多くは語らず、まして古代人の心の想い、精神的遺産は我々に伝わって来ないでしょう。

本を収めている図書館は、人類の築き上げて来た偉大な精神文化を、不朽の財産を現在に、

そして未来に向かって保持し続けているのです。

字の意味	牡牛	太陽(日)	鳥	魚
絵文字 3,500BC				
スメル楔形文字				
早期バビロニア文字 2,500BC				
アッシリア文字				

古代文字の表記法

西洋図書館小史

この稿は、図書館のことを余りご存じない方々のために、少しでも図書館のことを知って親しみを覚えてほしいと思い、西洋図書館のごく簡単な歴史を記してみたいと思います。

I 古代篇

世界で最初の文明が生れたのはチグリス、ユーフラテスの二大河川に挟まれたメソポタミア地方であるといわれていますが、世界で最も古い図書館が発見されたのもこの地方です。

紀元前3千年期のシュメール時代、2千年期のバビロニア時代に、すでに楔形文字によって粘土板に書かれた図書がありました。メソポタミア地方のアッシリアの首都ニネヴェ(Ninveh, 現名 Kouyunjik) で発掘されたアッシュール・バニパル王(Assurbanipal, BC668~626)の王宮(神殿)図書館は、夥しい粘土板図書で埋もれていました。これらの粘土板に刻まれた楔形文字を解読することによって、我々はこの地方の古代における政治、経済、伝承などについて多くのことを知ることができました。

古代においては、王は神権によって統治し、神殿は信仰の中心であると同時に、政治・経済の中核であり、また裁判所や登記所等の機能をあわせ持っていました。そうして、そこには、記録を保管し、閲覧する図書館が存在しなければならなかったのです。

アッシリアは、BC 612年の戦乱で滅び、こ

附属図書館

主任 八木 克彦

の王宮図書館も破壊されました。図書館は、権力者による建設、戦乱による破壊、再建、そしてまた戦乱を繰り返し、民族と共に栄え、民族と共に滅びる歴史を辿りましたが、いつの世においても、人類は自らの行為を何らかの必要のために記録し、その記録が次の行為の足がかりとなり、こうして書き留められた記録の堆積が、即文明となって行きました。図書館は、人類の知的遺産を時代から時代へ、民族から民族へと伝えてゆく上において大きな役割を果たしているのです。

さて、一方メソポタミアと並んで西洋文明の原点となったエジプトにおいては、ナイル河畔に生い茂るカヤツリ草の一種パピルスから独特の書写材料を考案しました。パピルス文書は古代エジプト王の陵墓から発掘される副葬品の中から多く発見されていますが、エジプトにおいても古代は、メソポタミア地方と同様、神権による統治が行われ、神殿には図書館が併設されていました。

カルナック(古代エジプトの首都テーベの廃墟)やエドフー等の神殿図書館では、学問の神が作ったとされる「トト書」(Book of Thoth)が蔵書の中核となり、この他聖典や祈祷書が多数収蔵されていましたが、これらの書物を利用する者は、王や高官・高僧に限られていたようです。

ラメス二世(BC1300頃)は、テーベの宮殿

にかなりの規模の図書館をもっており、その図書館は、魂の施療院 (Dispensary of the soul) と呼ばれていたそうです。まことに、言い得て妙であると思います。

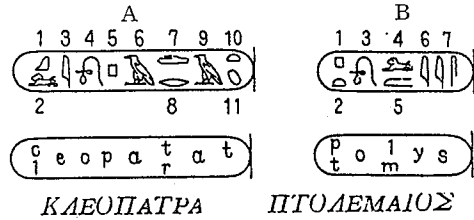
エジプトで発明されたパピルスは、BC 7世紀にはギリシャに到着し、その後、5世紀までに一般に普及しました。英語の Paper がこの Papyrus を語源としていることは周知のことです。

古代、中世を通じて世界最大の規模を誇った図書館は、アレキサンドリア図書館です。この館は、プトレマイオス I 世 (Ptolemaios I, BC 367~282) がアリストテレスのすゝめによって創設したもので、その後、プトレマイオス II 世に引継がれて発展したのですが、世界各地から収集したパピルスの巻軸図書は数十万巻にも達しました。この館には写本を専門とする職員がおり、彼等によって生産された写本は、図書館に収められると同時に、市販もされました。

アレキサンドリア図書館には、著名な学者ゼノドッス、アリストファネス、カリマクス等が

次々に館長に就任しましたが、カリマクス (Callimachus BC 305~240) が編集した120巻の総合目録はピナクス (Pinakes) と呼ばれて有名です。この目録は、主題ごとに分類されており、更にその中を著者のアルファベット順に配列、次の10分類がなされていました。即ち、①叙事詩、②ドラマ、③法律、④哲学、⑤歴史、⑥修辞学、⑦医術、⑧数学、⑨自然科学、⑩雑、です。

この図書館は、シーザーがBC 47年にアレキサンドリアを征服したとき、分館が焼失し、その後4世紀末、テオドシスの治下のとき、宗教上の理由から破壊されてしまいました。(つづく)



クレオパトラとプトレマイオスのヒエログリフ

附属図書館 織 田 忍

自然の美しい土地での、新しい短期大学の図書館で、毎日多くの本を手にして、そして多くの学生に接して、4年目になる。本を読むことも扱うことも大好きだから、本の山に囲まれての毎日を、とても愛している。学生たちの顔は若さにあふれてとても素適だから、多くの学生たちに囲まれての毎日を、とても愛している。

本が書店より図書館に納品されるまでに、多くのステップをふみ、さらに利用者の閲覧、貸出に供するまでに、1冊1冊でいねいに調べて、よりよく利用されるよう書架に配列するまでに、実に多くのプロセスを経る。

何度も手に取り整理した本には、とても愛着がある。だからある日、あるべき所にあるはずの本を見失った時、とても心が痛む。

毎日講義をこなし、試験をパスしての学生生活を終えることには、大へんな努力がいる。だけど一度決めた鍼灸の道は、無事歩み続け自己

のものとしてほしい。

毎日図書館を利用していた学生が、ふと図書館に来なくなる時がある。講義や試験は受けているのかしらと心配になる。毎日元気な学生が、ある日沈んでいると心配になる。だから志し中ばで去らないで、迷ったり、勉強に疲れた時には、図書館に来て本を手にとったり、静かに考えてみることも、一案だと思う。

すべて満点というわけには行かないが、私たちもよりよい図書館を目指しているし、図書館の本も、利用されるのを待っている。

図書館で得るものも多いはず。いつかあなた自身の生になるはず。図書館を通してのより充実した学生生活も、よい思い出となるはず。

毎日毎日、図書館を覗いてみてほしい。少しずつ、本が増えているはずだから。

毎日毎日、図書館を覗いてみてほしい。今日も、元気で頑張っていると安心するから。

あとがき

創刊号ということで挨拶文のオン・パレードのようになって了いましたが、これもこの図書館に寄せられる好意と期待のあらわれと感謝しております。次号からは各教室の先生方や事務局の方々にもご投稿願ひ、また新着書案内や読書紹介なども盛り込んで、より充実した館報にしたいと思っています。なにぶん初めての試みで読みづらい点や垢抜けしない点もあろうかと思ひます。大方の忌憚ない批判、好意ある助言をお待ちします。(K.Y.)